



日韓合同授業研究会会報

# 第 8 5 号

2013年3月31日発行

## 「3・11後の東北朝鮮学校の復興を支援する映画会」の 報告

大森

2013年1月30日、東京学芸大学N411教室（N棟4階）において「3・11後の東北朝鮮学校の復興を支援する映画会」が開催され、大学の内外から34名の参加を得ました。主催は「東京学芸大学有志で3・11後の東北朝鮮学校の復興を支援する映画会開催の賛同人」。賛同人20人を代表して中島裕昭さん（東京学芸大学芸術・スポーツ科学系音楽・演劇講座教授）が挨拶に立ちました。「2003年に国立大の入学資格から朝鮮学校が外されたとき、東京学芸大学では200名以上の教職員がこれに反対の意を表明しました。私たちの大学で差別のない教育界を実現するためのとりくみが重ねられてきたことをふまえ、本日、ここにこの映画会を開催いたします。いま私たちの足もとでも、これまでの大学における文化やルールを、その根底から損なうような動きが、3・11後にはじまっています。今日のこの映画会が、大学の内と外に生起している重要な諸問題について、地域と職場と生活の場をこえて、互いに助けあいながらとりくんでいく出発点の一つになれば良いと願っています。」

16時開会の第1部では、韓国の金明俊（キムミョンジュン）監督が北海道朝鮮初中高級学校に3年間にわたり密着して撮影したドキュメンタリー作品「ウリハッキョ」（2006年日本語字幕）の上映が行われました。ウリハッキョは「私たちの学校」の意味です。韓国の人々が、日本における朝鮮学校とそこに通う

子どもたちの生活について認識を深めた作品で、日本でも、日本語字幕版の上映が重ねられてきました。2時間11分の長編です。上映が終わると、N棟の窓からくっきりと見えていた奥多摩の山々の稜線もすっかり闇のなかです。「私の授業でも学生といっしょに観たいな」「DVDはどこで買えるかな」。1階の自販機前では、

### 目次

「3・11後の東北朝鮮学校の復興を支援する映画会」の報告	1
特集 韓国高校歴史教科書 「東アジア史」	
韓国高校歴史教科書「東アジア史」を読んで	3
地域の共同発展と平和のために	11
波多野先生の「東アジア史」発表を聞いて	15
学習会参加者の感想	16
短信	16

あたたかい缶コーヒーを飲みながら会話が続けました。

18時30分開会の第2部では、在日コミュニティの取材を重ねてきた朴思柔（パクサユ）と朴敦史（パクトンサ）による取材チーム「コマプレス」（コマは朝鮮語で子ども・小さきものを意味する）が撮影した2作品を上映。1本目は、2011年10月12日の山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映された「東日本大震災東北朝鮮学校の記録 2011.3.15～20」（67分版があるが32分版を上映）です。東北に2校ある朝鮮学校のひとつである東北朝鮮学校は、宮城県仙台市の内陸部に位置し、地震による人的被害はありませんでしたが、校舎が全壊しました。カメラは、震災後の寄宿舎における避難所の開設、同胞による支援、国境と民族をこえた相互扶助、学校の再建に向けた人々のとりくみを記録しています。学校は校舎を再建する方針ですが、行政は支援に動こうとしません（行政は2011年度に解体費は支出した）。映像の終わりに、黒い画面に白抜きで文字が映し出されます。「そんな中、宮城県は来年度から学校への補助金を打ち切ると通告。朝鮮半島情勢、および「県民感情」がその理由だという」。暗い教室の前からも後からも、痛みをともなったような声、言葉にならない声が聞こえてきました。

2本目は、福島朝鮮初中級学校の除染作業と合同授業についてのショート作品です。原発事故地点から60キロメートルの郡山市に位置している福島朝鮮学校では、子どもたちの放射線被害を最小にするため、教職員と親たちが話し合いを重ねてきました。カメラは、学校の理事による空間線量の測定の様子と、その測定値がびっしりと書き込まれたノートを映し出します。教職員と保護者は、校舎と校庭の除染作業を重ねますが、2011年5月15日から、新潟朝鮮初中級学校における合同授業に踏み出しました。合同授業とは、福島朝鮮学校の在校生全員が校長教員と一緒に新潟朝鮮学校に移動して泊り込み、そのことを通じて、放射線の被害から子どもを守ろうとしたとりくみです。新潟朝鮮学校の宿舎では、教員たちが、小さな子どもたちをお風呂に入れて、寝食を共にしながら勉強を重ねていきました（2012年12月まで継続した）。



この映画会の開催を通じて、主催者には、当日までに196口9万8000円のカンパが寄せられました。主催者事務局からは、「お寄せいただいた義捐金は、東北朝鮮学校と福島朝鮮学校に、主催者が直接届けて参ります」との報告が行われ、拍手により承認されました。いまま全国の朝鮮学校では高校無償化の適用除外が2010年度から続いており、さる2月13日には神奈川県が核実験を理由に朝鮮学校への補助金支出停止を決めたことが報じられました。全国の国立大学では8パーセントの給与削減が2012年度から始まっています。分断され、そのそれぞれが損なわれてきた教育界の現実と、寒風のなかでもそれらに異を唱える多くの人々の姿。前者だけでなく、後者の姿を、暗闇のなかにくっきりと浮かび上がらせた映画会でした（上映希望者はコマプレス [komavoice@gmail.com](mailto:komavoice@gmail.com) までお問い合わせください）。

## 特集 韓国の高校歴史教科書『東アジア史』

2012年度より韓国の高校では、「東アジア史」という新しい教科が生まれた。教学社と天才教育出版社の二つの現行検定教科書について、波多野淑子さんが分析し、日韓合同授業研究会の学習会で報告した。波多野さんの「東アジア史教科書」分析と、その分析に対する応答を掲載する。

### 韓国の高校用教科書『東アジア史』を読んで

波多野

#### 「東アジア史」とは

「東アジア史」は2007年の教育課程改定によって2012年度に新設された教科だ。生徒は中学で「歴史」（韓国史3：世界史2の割合、政治史と文化史が中心）を学び、高校では必須科目の「韓国史」（週3時間、社会経済史、思想史、対外関係史が中心）を履修後、「世界史」「東アジア史」の中からひとつを選択できる。（必修選択ではないので、それ以上歴史科目をとらない生徒もある。）教科書は現在のところ、天才教育（以下、天才）と教学社（以下、教学）の2社から出ている、いずれも国史編纂委員会の検定済である。なお、この科目は今のところ大学入試（修能試験）科目に指定されていないため、履修する生徒が少ないようである。一方で、入試と関係がないからこそ、生徒は（教師も）自由に学べるという利点があるだろう。

ここでいう東アジアとは、現在の国名で、モンゴル、中国、北朝鮮、韓国、日本、台湾、ベトナムに当たる地域である。教科設定の目的を巻頭言などから見ると、漢字、儒教、仏教など共通の文化要素を持ち、深い交流をしてきたこの地域に対する理解を深め、それをもとにして地域の共同発展と平和を追求する姿勢を養うことにあるという。過去の軍事的葛藤の記憶から来る不信任感、他国の歴史に対する無知と偏見、また排他的民族主義などが、地域共同体形成を妨げる要因であり、歴史を見る視野を広げることによって東アジアの人々を信頼できるようになるし、国家間葛藤の背景を客観的に知りその解決策を模索する助けになるだろうとも述べている。和解への努力が続けられていることも強調されている。

「客観的に」という姿勢は、従来の「国史」教科書とは違って、「わが民族」「われわれ」という語句は使わないとか、これまでの教科書では、日本の「天皇」という呼称を嫌ってか、「国王」（マスコミでは「日王」と呼んでいたのを「天皇」としたところなどからもうかがえる。このように理想的とも思える教科設定目標であるが、一方では、「東北アジア歴史戦争」とも呼ばれる中国の東北工程問題、日本との間の独島（竹島）問題・東海問題（日本海の韓国での呼称である東海を国際的に使用することを要求している）などを念頭に、韓国側の立場をしっかりと生徒に学ばせたいという狙いも見え隠れする。

通史ではなくテーマごとの記述なので、時代によってはほとんど言及されない時期がある

Pa

し、事柄の順序が逆になっていることもある（たとえば韓国の高度経済成長や冷戦体制の崩壊を述べた後に朝鮮戦争の記述がある）ので、いくら生徒はすでに一応通史を学んで知っているはずだと言っても、確実な知識になっていなければ混乱しそうだ。逆に言えば知識のある生徒にとっては、テーマに沿って深く考えることができるわけで、ここは教師の腕の見せ所だろうか。両教科書とも、各節ごとに「主題探求」・「探求活動」コーナーを設け、史料を提示しいくつかの問題を出して「考えて見ましょう」と呼びかけている。授業ではこれをもとにグループ別作業や発表が行われるらしく、詰め込み主義でない自発的学習を促している点が注目される。しかし天才では24、教学では41あるコーナーをすべて消化することはおそらく時間的に不可能なはずで、絵に描いた餅にならなければいいが。また教科書に示された史料のほかにはインターネットによる史料収集が勧められていて、本を読むことは期待されていないらしい。

このような範囲の「東アジア史」という教科の設定はとても新鮮で、ぜひ成功させたい。期待を持って2つの教科書を読んだが、優れた点とともに問題点も見えてきた。以下、いくつかのテーマについて、内容を見ていきたい。両書の構成は同じであり内容も似ている部分が多いので、特筆しない場合は、どちらにも共通していることを意味する。

## 環境が生活を規定する

まず自然環境が語られている。東アジア地域は季節風の影響を受けて、大陸内部は乾燥し海辺は湿潤であり、南北の気温差も大きい。そのため植生も多様で熱帯雨林地帯、常緑広葉樹地帯、混合林地帯、砂漠、草原地帯などさまざまに分かれる。こうした自然条件は当然水稲耕作、畑作、牧畜、遊牧、狩猟など多様な生産活動の違いを生み、それは一年の過ごし方、ものの考え方、さらには国家の形にも影響を及ぼすことが丁寧に説明される。ここで生活や国のあり方の違いにはそれぞれ根拠がある



ことを学ぶのは科学的認識方法の練習になり、その先の歴史でも、一見理解しがたい事態や行動にも何かの原因があることを生徒は推察できるようになるだろう。農耕民と牧畜民は互いに相手を蔑視していたが、それは相手の生産様式がなぜそうなのかを知らないことから生まれた偏見だった。一方で両者は自分にはないものを交換し合っていた。たとえば中国西南部からチベットやインドにいたる道を茶馬古道と言うが、それは隊商が海拔4,000メートルの険しい山道を馬やヤクに乗って行き来し、中国の茶とチベットの馬を交易したからだと紹介されている。

## 人の移動と文化の伝播

匈奴、鮮卑、契丹、女真、蒙古など北方の遊牧民族はしばしば南下して、いわゆる中原を略奪したりそこに住み着いて王朝を開いたりもしているが、それらの時期は気温が低下して牧草が育たず食料不足に陥った時期と正確に一致しているという図が示されている。人の移動はほかにも自然災害や戦乱によって惹き起こされ、ある移動はまた玉突き状態となって更なる移動を生んだ。人口移動の図を見ていると、人は住みやすいところを求めて移動するのが本来の自然な姿であり、現在のように国境線を敷いて人の行き来を妨害するのは歴史的に

見ると異常だという気がしてくる。しかし自分のテリトリーを侵されれば防衛しようとするのも自然なことだから、人の移動とその受容には暴力が伴う場合もあっただろう。(J. ダイヤモンドの近著『昨日までの世界』には、伝統的社会における、そのようなテリトリーに関する紛争が詳しく記述されている。) フン族(匈奴?)やゲルマン族の大移動やモンゴル帝国の建設は当然多くの殺戮や略奪を伴っていたが、同時に交通網の広がりや文化の伝播をもたらした。またそのような大規模な移動でなくても、少人数の移動は世界中いたるところで常に行われてきたと見るべきだろう。

日本列島に大陸や半島から人々が移住してきてさまざまな先進文化が伝えられたことは言うまでもない。しかし「東アジア史」教科書には「(韓半島は)紀元前3世紀ごろ日本列島に稲作を伝えた」「日本列島は伽耶から鉄器文化を受容して古代国家を形成した」とある一方で、「紀元前20~15世紀ごろから満州、韓半島地域では琵琶形銅剣と支石墓に代表される青銅器文化が形成された。」「紀元前2世紀ごろ満州と韓半島地域には鉄器文化をもとにして諸国家が生まれた」とあるのはフェアではない。本文に「韓半島の稲作は山東半島を経て伝えられたと見られる」という記述はあるが、日本にいろいろなものを伝えてやった韓半島は独自にそれらを開発したのだというニュアンスがある。青銅器文化や鉄器文化は韓半島にどこから伝えられたかも書くべきではないか?また、人びとは稲作を伝えるために移住したのではなく、おそらく災害や戦乱を逃れて日本列島に逃げてきたのだ。

筆者が言いたいことは、ある文化の伝播が早いか遅いかは、その地に住む人びとの優劣とは関係なく全的にその地の環境によるということだ。

(上記に関して、漢4郡とくに楽浪郡について、ほとんど記述されていないのは驚くべきことだ。「天才」には記述がなく、「教学」は、「古朝鮮が滅亡すると漢は古朝鮮の一部地域に郡県を設置して支配したが、土着民の強力な反発にあい、結局高句麗の攻撃を受けて消滅した」とだけ述べている。「結局消滅した」のは確かだが、楽浪郡は400年間続いたのだ。その間、漢のさまざまな文化が韓半島だけでなく日本列島にも伝えられたことが考古学の調査でわかっており、漢人の移住も多かったはずだ。日本では、たとえば百済から来た王仁博士は楽浪遺民系と考えられている。韓国・北朝鮮では、植民地時代に楽浪郡の発掘調査が日本の学者によって行われたことも影響して、楽浪郡が現在の平壤付近にあったことを否定し遼東にあったと主張する傾向が強い。つまり紀元前後において韓半島の一部が漢の支配下にあったことを否定し、韓民族の誇りを保とうとしているのだ。その気持は理解できるが、楽浪郡の故地から出土したたくさんの漢墓とその遺物を無視する態度は理解しにくい。)

## 満州は韓国?

「教学」の第1章の扉には東アジアを遊牧草原地帯、中原一帯、満州韓半島一帯、日本列島、ベトナム一帯の5地域に分け、紀元前の出来事がいくつか書かれている。満州韓半島一帯の出来事は、「紀元前2333年、古朝鮮建国」「紀元前7世紀古朝鮮、諸国と交易」「紀元前3世紀ごろ日本列島に稲作を伝える」「紀元前108年古朝鮮滅亡」の4つである。紀元前2333年とは、韓国の檀君神話による建国年代である。青銅器文化が生まれるはるか昔、殷周より1000年も前に国家が成立し、その年代まで確定しているというのは荒唐無稽としか言いようがなく、それを鵜呑みにすれば、生産力が発展して余剰生産物ができたところに富が生まれ権力が生まれるという国家発生メカニズムは理解されなくなる。神話を歴史とし、自国の建国をはるか昔に設定するのは、近代日本もおこなった愚かな行為だ。一方両書とも別のと

ここで韓国の檀君神話同様中国、ベトナムや日本にもそれぞれ建国神話があり、どの国の始祖も自らを天あるいは海の神の子と称したことが、かなり詳しく述べられている。これは自国の神話を相対化するうえで非常に有効である。

ところで本文には「古朝鮮が文献に現れるのは、中原が春秋戦国時代で分裂していた紀元前7世紀ころからだ」とあって、扉とは矛盾している。別に「紀元前20～15世紀ごろから満州、韓半島地域では琵琶形銅剣と支石墓に代表される青銅器文化が形成された。この支石墓は満州と韓半島一帯だけに見られる」とあり、満州の東南部から韓半島に及ぶその分布範囲がすなわち古朝鮮の領域だとしている。10年ほど前から、中国が東北工程プロジェクトにおいて高句麗と渤海を中国史の中の地方史だとみなしたことに韓国が反発している。将来韓半島が統一されたのちに予想される領土問題を先取りして韓国と中国は先鋭に対立している。とくにかつて間島と呼ばれた中国の延边自治州地域は、17世紀ごろから朝鮮人の流入が進んで、清と朝鮮との間で1712年の国境設定後も紛争が絶えなかった。その後大韓帝国を保護国とした日本が韓国領への編入をもくろんで清と交渉したが失敗し、しかし韓国人の居住は許すとされたのだった。(1909年、満州及び間島に関する日清協約) 抗日戦争中、激しく戦ったパルチザンの地、間島は韓国民の聖地かもしれない。ここでは古朝鮮の領域の広さを誇示してあらかじめ牽制しようとしているのだ。渤海についても「教学」では「探究活動」において「1 渤海史が韓国史の一部であることを調べ、自分の考えを述べよ。2 ‘東北工程’について調べ、中国がこれをおこなっている理由について考えよう」とある。古朝鮮・高句麗・渤海が韓国史の一部であれば、すなわちそれらの故地は韓国の領土であるという主張につながるのか、ここでは生徒にそう思わせようとしているらしい。領土問題は非常に政治的であり、歴史教育においては歴史的経過や双方の主張を冷静にあつかうべきだ。上述の神話の相対化のように客観的に歴史を学ばせようとする執筆者もあるが、政府の方針で檀君の建国が入れられているのかと思われる。

ついでに竹島(独島)問題について見よう。「教学」は、新羅時代から領有していた、朝鮮時代には日本も朝鮮の領土だと認めていた、第二次大戦後韓国が主権を行使しているが日本が不当に領有権を主張しているというあっさりした記述だ。「天才」も同様の記述だが、最終ページに「主題探求」として「独島ヒストリー」というインターネットのサイトに入っているいろいろなことを調べ、「3D旅行」コーナーでヘリコプターやボートからの映像でローソク岩、象岩などの名所?や漁民が住んでいる家などを見、「東海の独島は明白に大韓民国の領土だ」に入って地理的・歴史的・国際法的事項を調べ確認したのち、「独島見聞録」に学校名、クラス、氏名を明記した上で10行以上の感想を書けとなっている。これは実際どのように実施されるのだろうか。また別のところで「韓国国民は独島が日本の領土であるという日本の主張を、日帝の韓半島侵略を否定するものと認識している」という記述もあって並々ならぬ厳しさを感じる。



## 壬辰倭乱について

これまでの教科書での「壬辰倭乱」という呼び名が「壬辰戦争」に変わった。「教学」は「壬辰戦争の呼び名の違い」欄を設けている。韓国の歴史用語「壬辰倭乱」には理由もなく攻め

込んでものすごい被害をあたえた日本に対する怒りと敵愾心がこもっており、日本でいう「文禄の役」はただ戦争というだけで侵略という意味はなく、中国では「抗倭援朝」というが、朝鮮を助けて恩恵を施したという雰囲気強調されているという。今回なぜ「倭乱」を避けたのかは書かれていないが、これもまた冷静、客観的に歴史を見ようという姿勢からかと思われる。この戦争に関する記述は淡々としているが、明の参戦目的は遼東を守ることであり、明兵による略奪の被害も大きかった、その後女真（→後金→清）が勢力を強めて明と対立を深めると、明は日本との戦争で援助した借りを返せと朝鮮に出兵を迫ったことが強調されている。また日本の軍勢の約半分は強制的に狩り出された農民であったことに触れている点は公平な見方であり、高く評価したい。「教学」では豊臣秀吉が明・朝鮮の侵略を企てたとあるが、「天才」では「日本は16世紀後半、戦国時代の内戦を終えて領土の拡張と過度な軍事力の排出、そして貿易のために対外進出をたくらんだ」と、戦争の主体を日本にしている。日本史で文禄の役を扱う場合、秀吉個人の行為として見るのが普通だが、外から見れば日本国の行為としか見えないことも銘記したい。

## 日本の中世・近世について言及して欲しいこと

「天才」は中・韓・日に共通する中世の農業技術の発達を詳しく述べている。踏み車などの灌漑施設、施肥、品種改良などによって二毛作が普及したことなどで、それによって小農経営に変わり、手工業も発達し、人口も増加していくことが述べられている。この分野は社会の変化を理解する上で不可欠なのに、これまでの「国史」ではほとんど扱われていなかったから大いに喜ばしいことだ。図版もたくさん入っている。（図版についてついでに言うと、ほとんどの場合出典も時代も明らかでないため、史料として使いにくいのが惜しい。はなはだしくは、出典がどこの国かも書かれていない。）将来、これらの農業技術の伝播の道筋が明らかにされることを期待している。

その後10世紀ごろから新しい支配層が登場したという部分があるのだが、中国・韓半島では科挙を通じて官僚が選ばれる文臣体制ができたのに反して、日本では武士が政権を取ったとあり、武士は「一所懸命」のこぼれとおおり、現地の農業経営者だったことも書かれている。しかしその後武士勢力や武士による支配体制に関する記述はあまりない。「教学」では武士の発生・中央進出・鎌倉幕府・室町幕府成立までざっとたどっている。けれども応仁の乱を契機に「混乱が続いた（戦国時代）」とあるだけで、戦国大名に関する記述はなく、壬辰戦争後はいつの間にか江戸幕府ができています。通史ではないためすべてを網羅できないのはわかるが、室町・戦国時代は農業生産力が高まり、惣村が生まれ、各地に戦国大名が成長していく目覚ましい下克上の時代であり、その後の幕藩体制の基礎にもなった時代だ。日本のような封建体制がなかった韓国では理解しにくいのかと思うが、同時代の東アジアでも支配体制がなぜ異なるのか、その後の歴史の分岐点でもあるから、取り上げて比較してみるのには有益だろうと思う。

同様のもどかしさはあちこちで感じられた。まずポルトガル人の来航によって明や日本は交易をおこない、南蛮文化を取り入れるとともに東南アジア各地に出かけて行った。朝鮮にも漂着したオランダ人があって大砲の扱い方を教えたという。それならなぜ当時の朝鮮は海外貿易をしなかったのかと思うが、そういう視角はないのだろうか。

つぎに近世の都市について。地方分権の日本では江戸・大坂・京都だけでなく各地に城下町や港町ができて店が立ち並び、商工業が発達し、その土台の上に文学・演劇・絵画など豊

かな庶民文化が生まれた。教科書はそれに触れているが、朝鮮には漢陽（いまのソウル）以外に大きな都市はなく、地方には常設の店はなく定期市が立つ状態だったのとの違いをあまり認識していないようだ。また「人口が増えると庶民文化が発達する」とあるのは間違いで、そのためには庶民に金と余暇とある程度の教養がなければならない。

## 開港と明治維新について

開港以前の経済発達、朝鮮も日本も同程度であり資本主義経済への萌芽は朝鮮にもあったというのが、韓国史学界の共通認識で、それを否定するのは「植民地史観」「停滞性論」であるとされているらしい。では「天才」の「19世紀初めまで東アジア各国には長く平和が保たれており、それぞれの政権は安定していた」という記述は正しいか？（同書の6ページ前にはこれと反対に、日本では徳川吉宗以後「幕府の支配はしだいに弱まり社会不満が高まり」、朝鮮では正祖以後「かれが推進した全改革は霧散してしまい」、それぞれに衰退していったという、これと矛盾した記述もある。）日本の場合、苛酷な徴税に対する百姓一揆が全国各地で起こるとともに、先進地帯では専売に反対する大規模な生産者闘争が展開され、一部で問屋制手工業やマニュファクチュアも始まるなど経済構造も変化の兆しを見せ、支配体制は揺るぎ始めていた。とくに地方の諸藩では財政難を抱えて改革が模索されていた。

したがって明治維新の解釈が違ってくる。「天才」では「開港後物価上昇など混乱に陥り、開国に反対する下級武士たちが尊王攘夷を主張したが、幕府の武力弾圧によって開国支持・幕府打倒に変わり、明治維新を達成した」とある。これではなぜかれらが開国支持に変わったかがわからない。「教学」は「開港後、日本は列強の侵略と社会的混乱に対応し、江戸幕府を廃止して、天皇を中心に改革を推進した」というもっと簡単な記述で、幕府打倒の主体が何だったのかわからない。討幕派の志士たちは諸藩において藩政改革を模索する中で、豪農などとも交流して世の中の変化を感じていた下級武士たちだった。かれらは開国の不可避を悟って、強い統一国家を樹立して外国に対抗しようと望んだからこそ、その障害となる幕府を倒したのだという肝腎のところが書かれていない。この広範囲にわたる分厚い層の呼び名の存在が明治維新と近代化に成功した原因であり、単なる政権争いではなかった。両書とも、その後の開港後のところで朝鮮でも清でも開化派があらわれて改革を志したが、旧政権に阻まれて実現しなかったと述べている。日本だけが早い近代化を成し遂げたのは、明治維新が旧勢力を倒したからだとわかる。朝鮮と清で成しえなかった旧勢力打倒に、なぜ日本がいち早く成功したか。それは開国前夜の状況が違っていただけからだ。先に自然環境と生業・生活の違いの関係で学んだように、その違いを生んだ原因は何かを考えよう。地方分権の日本と中央集権の朝鮮とでは何がどう違っていただけ、突き止めることが必要だ。これもまた優劣の問題ではない。早く近代化した日本がその後誤った道を選んだのは確かだがそれはまた別の問題であるし、なぜ誤った道を選んだかについても日本の歴史から答えを見出せるだろう。

## 日本帝国主義の侵略と諸民族の抵抗

近代に入ると、日本帝国主義の侵略とそれに対する諸民族の抵抗が中心になるのは、当然だ。侵略に関しては事実を淡々と述べており、異論はない。ところで二つの教科書に大きな違いがある。「天才」は出来事の背景を述べていないのに対して、「教学」は、たとえば日清戦争時の英露の対立、日露戦争を巡る英米の思惑、第二次世界大戦前の世界恐慌とブロック経済について、さらに日中戦争に対する英米ソの態度などを説明している。日本が日中戦争



から太平洋戦争に進み、国家総動員体制をとったり韓国で皇民化政策をとったりする成り行きもよくわかる。国際情勢の影響があったからといって日本の責任が弱まるのではないが、いろいろな状況が絡んで事柄が起こり動いていくことを考えるのが歴史教育だ。「天才」の方法は、悪を悪として断罪しているだけであり、そこから生徒が学べるものは小さいのではないだろうか。折角の自発的学習も生かされないだろう。けれども指摘される日本の理不尽な侵略行為は一つ一つ胸に迫る。「天才」が設定している課題をひとつあげてみたい。

「共同教材、インターネットなどを参照して資料1（中国での三光作戦とくに北担村に関する文、『未来をひらく歴史』より引用）に提示されたもの以外に、日本軍が戦争中に犯した蛮行にはどんなものがあるか、調べてみよう。資料2の写真（日清戦争で被害を受けた平壤、南京大虐殺、東京大空襲）を見て、その内容を簡単に説明してみよう。資料3（関東大震災で犠牲になった韓国人たち）当時、韓国人以外に虐殺された人びとはどんな人びとだったか。資料4（東京裁判とB・C級裁判に関する文）のB・C級戦犯たちはおもにどんなことを担当していたか。資料5（慰安所が置かれた場所を示す地図と水曜集会をおこなっているもと慰安婦の女性たちの写真）の被害女性たちに対して日本政府はどんな態度をとっているか。」

韓国の生徒たちがこれらの問いに取り組む姿を想像してみる。かれらは大きな衝撃を受けるだろう。一方、現代史をないがしろにしている日本の生徒たちは、それに対応できる学習をしているか、韓国の生徒たちとこれらについて話し合えるか、非常に心もとない。資料3では大杉栄などを念頭においていると思われるが、どう発展させるのだろうか。

民族運動の部分もとても詳しい。中国の太平天国、義和団、辛亥革命、5・4運動。朝鮮の東学農民運動、愛国啓蒙運動、3・1運動、中国軍にくわわっての抗日戦争。ベトナムの対仏抵抗闘争。台湾の霧社事件。ここでも日本の生徒は知っているのかと心配になる。これらの闘いについて日本の生徒にも学ばせるべきだ。

## 戦後処理問題

ここでは戦後の冷戦体制が現代史に及ぼした影響を重視している。章の初めに「天才」は「第二次世界大戦当時、加害者と被害者に分かれていた東アジアの3国は冷戦の構図のもとで韓・日国交正常化をなしとげ、以後冷戦の緩和とともに中・日国交回復もなされた。これらはどのような過程で展開されたか？」と問いかけ、「教学」は「東アジア各国は地理的・文化的にとっても近いにもかかわらず、領土・過去事・経済関係においてしばしば葛藤に陥っている。それは第二次世界大戦後、新たな国際秩序を形成する中で、葛藤の原因がきちんと整理されなかったからだ。冷戦と各国の特殊な状況は現在の東アジアが形成される上で、どんな影響を及ぼしたか？」ともう一步踏み込んでいる。

「天才」は日韓国交回復が遅れたのは「日本が戦争および植民支配に対する責任を認めず賠償に微温的な態度を見せたことも障害物だった」と述べており、それは確かに正しい。いっぽう「教学」は「ドイツに対しては米ソが共同して戦争責任を追及したのに反して、日本はアメリカに単独占領されたために戦後処理はアメリカの思惑どおりになされた。当初日本に対して徹底した民主化と非軍事化を要求したアメリカは、冷戦の進行とくに中華人民共和国成立にともなって、日本の民主化よりは反共の拠点とする政策に転換した」と述べている。その結果が天皇の責任を追及しない東京裁判であり、被害国への補償のないままのサンフランシスコ条約となった。つまりアメリカの思惑によって日本の戦争責任はうやむやとなり、

それをよしとする勢力が日本国内で政権をとったし、常に豊かさと安定を求める国民もそれに追従したのだ。

現在問われているのは日本の「戦後責任」であり、日本政府の戦争責任に対する態度の裏にこのようなアメリカの思惑があったことを知ることは、もちろん日本にとっての免罪符ではなく、日本人にとって恥かしいことだが、韓国の生徒たちにこの間の事情を知ってもらえれば、現状を理解し、どのように国内を民主化・平和主義化していけるかを一緒に考える共通問題にできるかも知れない。

両国とくに韓国での激しい反対運動の中で締結された日韓基本条約については、共同安保体制によって共産主義に対抗しようとしたアメリカの要請によるもので、韓国側は日本の資本と技術が必要であり、日本側は韓国市場が必要だった、韓国は経済開発に必要な資金確保に重点を置いたため、日本の侵略と支配をめぐる謝罪と賠償問題をなおざりにしたと述べている。日本は最後まで「賠償金」名目での支払いを拒絶したが、それでも条約が締結されたのは韓国側の事情につけこんだと言えるだろう。教科書は触れていないが、この背後にはベトナム戦争をめぐるアメリカの思惑があった。アメリカは韓国にベトナムへの派兵を求め多額の給料を兵士たちに支払うとともに、日本に国交を回復して韓国に資金援助をすることを求め、見返りとして沖縄返還協定を結んだのだ。さらに東南アジア諸国に対する日本の賠償金支払いについて、「教学」が「自分がおこなった行為に対して真相を究明したり、被害の実態を把握したりすることはなかった」と言うのには、虚をつかれた思いだ。「日本は賠償を経済協力の形で済ませたが、それは海外市場の確保と投資につながるものだった」という批判は真摯に受け止めるべきだろう。

## 現在の課題

領土問題や従軍慰安婦・強制連行被害者などへの補償問題以外に両書が力を入れているのは歴史認識や日本の右傾化である。「天才」は90年代以降、日本経済の悪化により政治情勢が変動するに伴って保守勢力の声が高まり、日の丸・君が代の法制化がなされ平和憲法の改正も企図されているうえ、過去の侵略の歴史を美化しようとする教科書が登場して韓国の国民感情を悪化させたと述べている。「教学」は自由社の中学校用の『新しい歴史教科書』にある出撃する特攻隊機を見送る女学生の写真と大空襲によって焼け野原となった東京の写真を題材に、「上の写真が日本の中学生にアジア・太平洋戦争に関してどんな歴史意識を植え付けるか、韓国の歴史教科書と比較してみよう」としている。この2枚の写真はそれぞれ歴史を証言するものであるが、一緒に掲載されることによって「けなげに戦った日本人と被害を受けてかわいそうな日本」という印象を作り出している。筆者が在職中、多くの生徒が「原爆や大空襲の被害を知って、日本はかわいそうな国だったと思っていた」と述べたことを思い出す。人はともすれば自分の立場だけから物事を判断しがちであり、自由社だけでなくすべての日本の教科書は加害の写真も掲載するのがフェアだろう。

一方で、日本人の中にも朝鮮侵略や戦争に反対した人があったことも書かれている。内村鑑三、石橋湛山、金子文子、布施辰治、斉藤隆夫らが紹介されており、最近の人では新大久保駅構内で人を助けようとして犠牲になった韓国人留学生李秀賢とともに、強制動員真相究明ネットワーク元事務局長福留範昭が取り上げられている。そのほか無政府主義者たちの国境を越えた反戦のための連帯や韓国の衡平社と日本の水平社の連帯など平和を求める国際的連帯を取り上げていて、今後もそのような連帯を広げようという姿勢を見せている。(共産主義者らの連帯については言及されていない。)

今回は主として日本と韓国の関係を中心に見たが、中国史をどう見るかも大事だ。東アジア地域にはさまざまな対立があるが、互いの歴史を学んで相手を理解することは対立を和らげる上で役立つだろう。環境汚染・自然破壊や原発問題のようにどうしても広い地域でともに考えなければならない問題もある。長い時間と広い地域で起こったさまざまな事柄の中から何を取り上げ、どう書くかは非常に難しい。今後『東アジア史』の内容のいっそうの充実を願うし、日本でもこのような視角が必要だと思う。

歴史学習とは、現在わかっていることや、まして政府の主張を覚えるためのものではなく、史実を確かめ何がなぜどうなったか、わからないことを探求するものである。またそれによって現状を客観的に見る方法を会得するためのものだ。そんなわくわくする体験を生徒にさせたい。

(以上、韓国「東アジア史」教科書の民族主義的な部分、実証的でない部分を指摘してきたが、日本でも「新しい歴史教科書をつくる会」の登場以来、教科書で日本民族の優越性を生徒に教え込もうとする勢力の力が強まっていることに危惧を覚えている。)

2012. 12. 18

## 地域の共同発展と平和のために

— 波多野先生の東アジア教科書分析を中心に —

(チョンジョンイク 韓日合同教育研究会 安山高校)

ジョージ・オーウェルは著書『1984』において、「過去を支配するものは未来を支配し、現在を支配するものは過去を支配する」という有名なことばを残した。現在を支配するものたちが過去を捏造し未来まで牛耳るという意味だ。このことばは昨今の東アジアの現実そのままあてはまるだろう。韓国の立場から言えば、中国の東北工程推進と日本の独島領有権の主張も過去を操作して未来を先取りしようという意図だと思われ、ジョージ・オーウェルの主張と符合するように見える。

中国の東北工程推進と日本の独島領有権の主張は韓国民を激昂させたが、一方では「ちゃんとした歴史教育」の必要性を切実に感じさせもした。「ちゃんとした歴史教育」とは、最近東アジア各国間に惹き起こされている歴史にまつわる葛藤を克服し東アジアの平和と繁栄の基盤を作ろうということである。しかしその裏には中国と日本の歴史歪曲に対応するために、韓国なりの自救策を講じるという側面もある。このような雰囲気の中で「東アジア史」という教科が誕生することになった。



東アジア史は現実的の必要から出発したが、教育現場への適用はたやすいことではなかった。中国史は世界史教科の一部としてこれまでも教えられてきたが、隣国でありながらあまり扱われて来なかった日本史と、ほとんど知らないベトナム史を教えることは大問題だった。結局ほとんどの教師たちは準備できないまま教室に行かねばならなかった。教科書と教師用指導書だけを読んで。そうして1年が過ぎた。

そんな中、嬉しい知らせがあった。それは韓日両国の交流と歴史理解に関心深く、長い間平和な交流に尽くしてこられた波多野先生が、韓国の東アジア史教科書を分析されたことだ。互いの授業参観、授業報告および個別の交流などを通じて、波多野先生はどちらかの側に偏ることなく客観的立場で歴史を理解しそれを生徒たちと分かち合おうとされてきたことをよく知っている。そのため先生の教科書分析（日本史中心の分析）を喜んで読んだ。さて、先生の精密で意表を衝いた分析を見よう。以下の文は波多野先生の東アジア史教科書分析に対する筆者の感想である。

まず、東アジア史教科書では古代韓半島と日本列島の文化伝播に関する記述において相変わらず公平でない点が目に付く。韓国史教科書はもちろん東アジア史教科書もまた、古代韓半島人たちが日本列島に優秀な文化を伝えてやったという風に記述している。ところが中国から韓半島に伝えられた技術に関する記述はおろそかだ。韓半島の国家は自主的・主体的に発展したが日本は韓半島の助けによって発展したという記述で、生徒たちに歪曲された歴史認識をあたえることになるという、波多野先生の指摘は相当意味がある。このような書き方はかなり以前からあって、学界から批判されているが容易に変わりそうもない。政府が定める教育課程が変わらない限り教科書執筆者たちもやむなく従わなければならない部分である。

第二に、教科書の中に誰が見ても客観性がない部分がある。韓国の教科書は政府主導の教育課程と検定体制の下で発行されるために、著者の個別な考えがいくら客観的であっても制約を受ける場合がある。（この点は日本も同じだと思う。）数年前金星出版社の韓国近現代史教科書が左傾しているというハンナラ党（李明博政府）の指摘によって、教育科学技術部が出版社に強制して、著者たちの同意なしに勝手に教科書の内容が修正されたことがあった。大法院は著者たちを支持したが、新しい教育課程の導入によって教科書論争は幕を閉じ、著者たちだけが傷つく結果となった。一方の意見だけを聞いて政府がうかつに乗り出して客観性を踏みにじった例だと言えるだろう。波多野先生が批判している古朝鮮の建国年度（BC2333）の場合も同じだ。学者・教師たちの大部分は古朝鮮の建国年度に問題があることを知っている。しかし在野史学界の強力な反発と政府の消極的な対応が、理解できない歴史体系を生むことになった。加えて中国が東北工程推進を通じて満州に対する歴史的領有権を

主張している状況で、韓国としてはいっそう古朝鮮を強調する必要がある、古朝鮮建国年度が間違っているにもかかわらず教科書に載せているのだと思われる。

第三に、韓日両国の現代史に対する東アジア史教科書の認識は、(壬辰戦争という単語のように)、大體中立的で客観性を保とうと努力しているが、ある面では相変わらず二つの尺度があるようにも思える。たとえば日本の右傾化傾向に対しては憂慮を示しても、韓国の右傾化には目をつぶるという風だ。日本で日章旗への敬礼と君が代斉唱を拒否した教師たちに対して懲戒がなされたとマスコミが報道すると、韓国内ではこれに対する憂慮を示す記事が相次いであらわれた。一方韓国内でも国旗に対する敬礼を拒否した教師が重懲戒された事例があるが、それは保守マスコミが中心になって批判する記事を書いたことから政府が下した決定だった。歴史的背景が少し違うことは違うが、両事件とも両国が政治的に右傾化ないし保守化している一面を見せている。ところが教科書は日本だけを批判している。他人から被害を受けたものとしては当然の反応かもしれないが、国内の右傾化も厳しい目で見なければならぬのではないかと思う。

第四に、日本史に関する紹介がかなりお粗末だ。東アジア史教科書は韓中日三国を中心に叙述されていることは、読めばすぐわかる。これを通じて三国が長い間深い交流をし、互いに影響し影響されてきたことを強調しているらしい。しかし中国が強大国として東アジア社会を牛耳っていたため中国に関する記述が多い反面、日本に関する記述は少ない。そして中世日本に関する内容はほとんど100年単位で整理されていて、武士社会の具体像を詳しく知ることができないのが残念だ。この傾向は近代日本にも及ぶ。

韓国が近代日本に注目する部分はやはり明治維新だ。近隣三国の中でどうして日本だけが近代化に成功し帝国主義の道に進んだのかという点だ。そもそも日本の底力はどこから出てきたのか？教科書にはこの点がほとんど取り上げられていない。それよりも明治維新がどう推進され、注目すべき内容は何かということだけを提示している。これは乳牛を育てようとする農民が乳牛を上手に育てている専門家の家に行き、乳牛が何を食べているかだけを見て、その専門家が乳牛を育てるために、それまでどんな努力をし、何を学んできたかというような基本的なことを見逃してしまう愚を冒しているのだ。うわべだけを見ていて内実は捉えられないわけだ。この点を先生はよく指摘されている。

東アジア史という教科は1年で必須課程である韓国史を学んだ後、選択で学ぶ深化課程だ。したがって教科書の内容は韓国史をある程度は知っているという前提の下で出発していて、合わせて中国史を中心に日本史、ベトナム史などをテーマ別に構成している。膨大な内容をどのように有機的に構成し東アジア社会の歴史展開を生徒たちに理解させるかが鍵だ。授業は1週3時間、それで国家別の内容がおろそかになり縮約が多いために、日本史学習については多大な物足りなさを残すことになった。

一方で先生の教科書分析にはいくらか残念な点がある。それは分析が主に政治史中心であることだ。教科書がそもそも政治の領域を多く扱っているのだが、多元化した社会を生活している生徒たちに政治的観点からだけでなく、ほかの観点からも歴史を見ることができるよう、教師たちは指導しなければならないのではないかとすなわち教科書から疎外された人びとを訪ねてかれらの目で歴史を見る追体験の章を設けては？という願いだ。女性の目で見ると歴史、女真人や琉球人の目から見た東アジア史、奴婢や奴隷交易、倭寇の出現が三国に及ぼした影響など。教科書があまりにも巨視的立場からだけ書かれているので、個人（あるいは疎外された人びと）の暮らしは完全に消されている。かれらの暮らしを復元して授業の資料としたら、充分意味のある歴史教材になるだろう。

以上は波多野先生の東アジア史教科書分析に筆者なりの考えを加えたに過ぎない。先生の文は第三者の立場で書かれ、内国人（韓国人）がそこまでは発見できず見過ごしていた誤りを指摘してくださった。実に胸がどきりとし虚を衝かれた思いだ。

先生は筆者にとって同志であり先輩でありメンター(mentor)でもある。筆者がこれほど先生に大きく共感する理由のひとつは、近代日本の失敗や過ちを認めそれを平和的に話し合おうとする意思に感動したからだ。その媒介がまさに歴史教育だ。先生は2003年、最後の授業で帝国主義日本の問題点を指摘された。それも自分が直接体験した当時の資料によって。この報告でも先生は日本の生徒たちが東アジア各国の民族運動について詳しく知ることを望んでおられる。また教科書の冷静な日本批判も謙虚に受け入れる姿勢を示されている。韓国人（あるいは韓国の教師）として先生のような姿勢に頭が下がる思いだ。もちろん先生は韓国の誤りに対する批判も鋭い。

いま東アジア史の授業が行われてようやく1年が経った。これから進むべき道は遠い。授業が安定するためにはよい教科書の定着が必須だと思われる。教科書に縛られることが多い韓国の教育の現実において、教科書執筆は非常に大切なことだ。したがって東アジア歴史学自体の発展も重要だろうが、徹底した教科書分析とそれを通じた教科書政策がおろそかにされてはならない。そんな意味で波多野先生のこの作業は大きな意味を持つと言えよう。

この文を終えるにあたって蛇足をひとつ付け加えたい。現在を生活しているわれわれだが、われわれは過去から久遠の希望を求めねばならない。それが歴史学の存在理由であり、歴史学が現実社会のために責任を負うべき使命でもある。過去に起こったトラウマは患者の現在を支配し、さらに未来をも決定する。いまある人が精神的に問題があるとしたら、われわれはその精神がいつ歪んだのか、その過去の時点に立ち返らねばならない。過去はわれわれがどうすることもできない、はるかかなたに過ぎ去ってしまった、そんなものではない。過去は執拗にわれわれの現在と未来にその影を落としているからだ。歴史学と歴史教育は、見かけは過ぎ去った必要ないこと扱うもののようにだが、実は現在と未来を対比するための人類の

最善の努力である。それは「ちゃんとした歴史教育」の必要性和「東アジア史」教科が生まれるにいたった理由を同時に説明することばだ。歴史を通じて東アジア地域の共同発展と平和が広がることを心から願う。（訳：波多野）

## 波多野先生の「東アジア史」発表を聞いて

安藤

以前韓国で、「東アジア史」という教科が創設されるという話を聞いたときは、画期的な出来事だと思った。従来歴史記述が自国中心であり、周辺諸国とのつながりや視点を欠いてしまっている点は、日本も韓国の歴史教育に共通している課題であると思っていただけである。

しかし今回波多野先生の発表を聞いて、私のこの期待が見事に裏切られてしまったことが残念である。

韓国における歴史教育が、ナショナリズム的傾向が強いことは、いたしかたない面もあると思うが、歴史をできるだけ科学的に、客観的な視点で見ることの大切さを考えてきた私としては、どうしても納得できない。

そもそも波多野先生のお話から察して、「東アジア史」のよりどころとする史観は、韓国において今日の「国家」「民族」が悠久の歴史の中に不断に続いてきている視点でとらえ、韓民族の永続性を強調している一方で、歴史の中で常に人間の移動、しかも大規模な動きが歴史の転換期におこっているという考察が足りないように思う。歴史の多元的視点が少ないのである。これは日本の歴史についても言えると思うが、常に政治経済・社会の中枢を握ってきた人々（人種）が同じであるという発想で、科学的ではないと思う。さらに「領土」「国民」についても、それが確定したのは近代以降の極めて最近の出来事であり、過去において、現在の国家がある場所にあった王朝が膨張したからといって、現在の領土以上にその地域の領有を考えることも現実でないだろう。日韓間の「竹島・独島」問題や中韓の「東北工程」についての、韓国の主張の正当化のために、さまざまな歴史的事象を都合よく重ね合わせているように感じてしまうは、私のうがった見方のせいだけなのだろうか。ナショナリズムを強調する歴史観が、結局誤った方向へ人々を導く例は、戦前の「皇国史観」と軍国主義の連鎖をみれば明らかである。

現在「東アジア」はそれぞれの国内矛盾を互いの隣国にぶつけあっているような気がする。そしてその際、それぞれ自分たちの「正当性」を歴史から引き出そうとしている。

しかしそれはこの地に住む人々を幸福に導くことはないだろう。歴史の不幸といったらよいのだろうか。もし本当の幸福を我々が望むのであれば、この地域にもナショナリズムを超えた思想が重要であるという考えに至らなければならないだろう。そのような視座からの「東アジア史」が大切なのではなかろうか。そして振り返って考えてみれば、私たち「日韓合同授業研究会」の目標は、この視座だと思う。日韓のみでなく東アジアに生活する人間として考えよう。私はそう思いながら、波多野先生のお話を



聞いていた。

## 学習会参加者の感想

(2月24日 アジア文化会館にて)

- 国家戦略的につくられた教科書のように思われる。
- 記述の弱い部分は国策に合わなかったりして書けないものを省いた結果では？  
中国との冊封体制の下にあった当時の文化的特性には言及していない。
- 中国に対する冊封体制の理解なしに韓国史は理解できないのではないか。  
日本が受け入れた南蛮文化をなぜ受け入れなかったのか、などの疑問から一国史を  
抜け出て歴史を考える意義が生まれると思う。
- 韓国の教科書を批判的に読むという作業を行うとき、「わが身を振り返る」という姿  
勢が求められる。特に現在も戦争責任を果たすことなく、歴史を歪曲する「つくる  
会」教科書を使用する私たちの在り方を省みたい。

## 短信

○春休み中、福島を訪問します。課題は、朝鮮学校への実践報告の依頼と、日韓合同授業研究会を立ち上げたときのメンバーのHさんを訪ねることです。今年の交流会開催地陝川(ハプチョン)は、広島原爆で被害にあった人が多く住むので、「韓国の広島」と呼ばれています。この陝川が、フクシマ以降、注目されています。ヒロシマ—陝川—フクシマについて、子どもと共に生きる教師の実践を中心に語り合いたいと考えています。

○韓国側より、日本の絵本を紹介されました。『やくそくのどんぐり』です。作者は、文：大門高子 絵：松永禎郎(新日本出版社)です。李順基(イスンギ)という広島で生まれ、被爆した人が、陝川で暮らしていて発病したのち、広島県立共立病院名誉委員長で詩人の丸谷博さん(ペンネーム御庄博実)と出会いました。李順基さんの人生と二人の友情を通して、広島・陝川の事実を伝える物語です。丸谷さんは詩人の石川逸子さんと、『引き裂かれながら私たちは書いた』(西田出版)という在韓被爆者の手記もまとめています。(F)

### モイムのお知らせ

4月7日(日) 14:00~

アジア文化会館(千石)にて

内容 在韓被爆者のVTR  
交流会について  
他

ウリ 85号 2013年3月31日

日韓合同授業研究会

〒102-0074 東京都千代田区九段南3-9-11

マールコート麹町303

吉峯総合法律事務所内

事務局連絡先(事務局長 藤田)

E-mail [larrabee1991@yahoo.co.jp](mailto:larrabee1991@yahoo.co.jp)

会費納入先

郵便振替 00170-1-428530